くなつて、五六年のうちにはほこらが張りさけてしまふので、三度めにはよほど大きく建て直したさうです。（燈下錄。德島縣那賀郡伊島）

かういふ例はいつも海岸に多かつたやうであります。鹿兒島灣の南の端、山川の港の近くでも、昔この邊の農夫がお祀りの日に潮水を汲みに行きますと、その器の中に美しい小さな石がはひつてをりました。三度も汲みかへましたが、三度とも同じ石がはひつて來るので、不思議に感じて持つて歸りましたところが、それが少しづつ大きくなりました。驚いてお宮を建てゝ祀つたといひ傳へて、それを若宮八幡神社といつてをります。さうして御神體はもとはこの小石でありました。（薩隅日地理纂考。鹿兒島縣揖宿郡山川村成川）

沖繩縣などで今も村々の舊家で大切にしてゐる石は、多くは海から上つた石であります。別にその形や色に變つたところがないのを見ますと、何かそれを拾ひ上げた時に、不思議なことがあつたのであらうと思ひます。薩摩に

は石神氏といふ士族の家が方々にありますが、いづれも山田といふ村の石神神社を、家の氏神として拜んでをりました。そのお社の御神體も、白い色をした大きな御影石の樣な石でありました。昔先祖の石神重助といふ人が、始めてこの國へ來る時に道で拾つたともいへば、或は朝鮮征伐の時に道中で感得したともいひ、これも下總の宮間氏の石の如く、草鞋の間に挾まつて何度捨てゝもまたはひつてゐたから、拾つて來たといふ話がありました。しかし今日では運搬することも出來ない程の大石ですから、これもやはり永い間には成長したのであります。（三國名勝圖會等。鹿兒島縣薩摩郡永利村山田）

石に神樣のお力が現れると、昔の人は信じてゐたので、始めから石を神として祀つたのではないのですが、神の名を知ることが出來ぬときには、たゞ石神樣といつて拜んでゐたやうであります。それだから土地によつて、石のあるお社の名もいろ〳〵になつてをります。備後の鹽原の石神社などは、村

の人たちは猿田彦大神だと思つてをりました。その石などもおひ〳〵に成長するといつて、後には縱横共に一丈以上にもなつてゐました。普通には石神は路のかたはらに多く、猿田彦もまた道路を守る神であつた爲に、自然にさう信ずるやうになつたのであります。（藝藩通誌。廣島縣比婆郡小奴可村鹽原）

常陸の大和田村では、後には山の神として祀つてをりました。これは地面の中から掘り出した石と傳へてをります。始めは袂の中に入れるほどの小石であつたのが、少しづつ大きくなるので、清いところへ持つて來て置くと、それがいよ〳〵成長しました。それで主石大明神と唱へてゐたといひ傳へてをります。（新編常陸國志。茨城縣鹿島郡巴村大和田）

石には元來名前などはないのが普通ですが、かういふことからだん〳〵に名が出來るやうになりました。伊勢石、熊野石が伊勢の神、熊野權現のお社にあるやうに、出雲石、吉田石、富士石、宇佐石なども、もと〳〵それ〴〵

の神を祀る人たちが、大切にしてゐた石でありました。鎌倉石も多分鎌倉の八幡樣の、お力で成長したものと考へてゐたのだらうと思ひます。しかしどうして來たかゞよく分らぬ石には、人がまた巾著石とか袂石といふやうな、簡單な名を附けて置いたのであります。

羽後の仙北の旭の瀧の不動堂には、年々大きくなるといふ五尺ほどの岩があつて、それをおがり石と呼んでをりました。おがるといふはあの地方で、大きくなるといふ意味の方言であります。（月之出羽路。秋田縣仙北郡大川西根村）

備後の山奥の田舍にはまた赤子石といふのがありました。それは昔は三尺ばかりであつたのが、後には成長して一丈四尺にもなつてゐたからで、そんなに大きくなつてもなほ赤子石といつて、もとを忘れなかつたのであります。（藝藩通誌。廣島縣比婆郡比和村古頃）

飛驒の瀨戸村には、ばい岩といふ大岩がありました。海螺といふ貝に形が

似てゐるからとも申しましたが、地圖には倍岩と書いてあります。これもお
ほかたもとあつた大きさより倍にもなつたといふので、倍岩といひ始めたも
のだらうと思ひます。（要太後風土記。岐阜縣益田郡中原村瀬戸）

播州には寸倍石といふ名を持つた石が所々にあります。たとへば加古郡の
野口の投げ石なども、土地の人はまた寸倍石と申しました。ちやうど鄕境の
林の中にぽつんと一つあつて、長さが四尺、横が三尺、鞠の様な形であつた
さうですから、前には小さかつたのが少しづつ伸びて大きくなつたと、いひ
傳へてゐたものと思はれます。投げ石といふ名前は方々にありますが、どれ
もこれも大きな岩で、とても人間の力では投げられさうもないものばかりで
あります。（播磨鑑。兵庫縣加古郡野口村阪元）

大抵の袂石は、人が注意をし始めた頃には、もう餘程大きくなつてゐたや
うであります。さうして土地で評判が高くなつてから後は、ほんたうはあま

り大きくはなりませんでした。前にお話をした下總の熊野石なども、熊野か
ら拾つて來た時は燧袋の中で、もう大きくなつてゐたといふくらゐでありま
したが、後にはだんだんと成長が目に立たなくなりました。二十年前に比べ
ると、一寸は大きくなつたといふ人もあれば、毎年米一粒づつは大きくなつ
てゐるのだといふ人もありましたが、それはたゞさう思つて見たといふだけ
で、二度も石の寸法を測つて見ようといふ者は、實際はなかつたのでありま
す。或は出雲の飯石神社の神石のやうに、もとはお社の中に祀つてあつたと
いひ、または筑後の大石神社の如く、以前のお宮は今のよりも、ずつと小さ
かつたといふ話は方々にありますが、それは遠い昔のことであつて、石の大
きくなつて行くところを、見てゐるといふことは誰にも出來ません。筍のや
うに早く成長するものでも、やはり人の知らぬうちに大きくなります。まし
てや石は君が代の國歌にもある通り、さゞれ石の巖となる迄には、非常に永

い年數のかゝるものと考へられてゐたのであります。つまりは一つの土地に住む多くの人が、古くから共同して、石は成長するものだと思つてゐた爲に、かういふ話を聽いて信用した人が多かつたといふだけであります。

山の背くらべ

石が出しぬけに大きくならうとして、失敗したといふ話も殘つてをります。例へば常陸の石那阪の峠の石は、毎日々々伸びて天まで屆かうとしてゐたのを、靜の明神がお憎みになつて、鐵の沓をはいてお蹴飛ばしなされた。さうすると石の頭が二つに碎け、一つは飛んで今の河原子の村に、一つは石神の村に落ちて、いづれもその土地ではほこらに祀つてゐたといふ話があります。

一說には、天の神樣の御命令で、雷が來て蹴飛ばしたともいつて、石那阪ではその殘つた石の根を、雷神石と呼んでをりました。高さは五丈ばかりしかありませんが、周りは山一杯に根を張つて、なるほどもしこのまゝで成長し

たら、大變でめつたらうと思ふやうな大岩でありました。（古話集其他。茨城縣久慈郡阪本村石名阪）

陸中小山田村のはたやといふ社の周圍にも、大きな石の柱の短く折れたやうなものが、無數に轉がつてをりましたが、これも大昔の神代に石が成長して、一夜の中に天を突き拔かうとしてゐたのを、神樣に蹴飛ばされて、このやうに小さく折れたのだといつてをりました。（和賀稗貫二郡志。岩手縣和賀郡小山田村）

南會津の森戸村には、森戸の立岩といふ大きな岩山があります。昔この山が大きくならうとしてゐた時に、やはりある神樣が來て、その頭を蹴折られたといつてをります。さうしてそのかけらを持つて來て、逆さに置いたのがこれだといつて、隣りの岩下の部落には逆岩といふ高さ八丈、周り四十二丈ほどの大きな岩が今でもあります。（南會津郡案內誌。福島縣南會津郡館岩村森戸）

山を木などのやうに順々に大きくなつたものと、思つてゐた人がもとはあ

つたのかも知れません。富士山なども大昔近江國から飛んで來たもので、その跡が琵琶湖になつたのだといふ話がありました。奧州の津輕では、岩木山のことを津輕富士といつてをります。昔この山が一夜のうちに大きくならうとしてゐる時に、ある家のお婆さんが夜中に外へ出てそれを見つけたので、もうそれつきり伸びることを止めてしまつた。誰も見ずにゐたら、もつと高くなつてゐる筈であつたといふ話であります。磐城の絹谷村の絹谷富士は、富士とはいつても二百メートルほどの山ですが、これもちやうど地から湧き出した時に、ある婦人がそれを見て、山が高くなると大きな聲でいつたので、高くなることを止めてしまひました。もし女がそんなことをいはなかつたら、天にとゞいたかも知れぬと、土地の人たちはいつてをります。（鄕土研究一編。福島縣石城郡草野村絹谷）

駿河の足高山は、大昔諸越といふ國から、富士と背くらべをしに渡つて來

た山だといふ話があります。東海道を汽車で通る時に、ちやうど富士山の前に見える山で、長く根を引いて中々大きな山ですが山の頭がありません。それは足柄山の明神が生意氣な山だといつて、足を擧げて蹴くづされたので、それで足高は低くなつたのだといつてをります。その山のかけらが海の中に散らばつてゐたのを、だん〳〵寄せ集めて海岸に、小高い一筋の陸地をこしらへました。それが浮き島が原で、そこを今鐵道が通つて居ますが、以前の道路は十里木といふ所を越えて、富士とこの足高山との間を通つてをりました。さうして右と左に二つの山を見くらべて、昔の旅人はこんな話をしてゐたのであります。（日本鹿子。靜岡縣駿東郡須山村）

伯耆の大山の後には韓山といふ離れ山があります。これも大山と背くらべをするために、わざ〳〵韓から渡つて來た山だから、それで韓山といふのだといひ傳へてをります。それが少しばかり大山よりも高かつたので、大山は

腹を立てゝ、木履をはいたまゝで韓山の頭を蹴飛ばしたといひます。だから今でもこの山の頭は缺けてをり、また大山よりは大分低いのだといふことであります。（鄕土研究二編。鳥取縣西伯郡大山村）

九州では、阿蘇山の東南に、猫岳といふ珍しい形の山があります。この山もいつも阿蘇と丈競べをしようとしてゐました。阿蘇山が怒つてばさら竹の杖をもつて、始終猫岳の頭を打つてゐたので、頭がこはれて凸凹になり、また今のやうに低くなつたのだといひます。（筑紫野民譚集其他。熊本縣阿蘇郡白水村）

山が背くらべをしたといふ傳說は、ずゐぶん弘く行はれてをります。例へば臺灣の奥地に住む人民の中でも、霧頭山と大武山との兄弟の山が競爭して、弟の大武山が兄の霧頭山をだまして一人でする〳〵と大きくなつたといふ話があります。それだから大武山は、兄よりも高いのだといつてをります。

（生蕃傳說集。パイワン族マシクジ社）

それからまた古い時代にも、同じ傳説があつたのであります。近江國では、淺井の岡が膽吹山と高さくらべをした時に、淺井の岡は膽吹山の姪でありましたが、一夜の中に伸びて、叔父さんに勝たうとしました。膽吹山の多々美彦は大いに怒つて、劒を拔いて淺井姫の頸を切りますと、それが湖水の中へ飛んで行つて島になつた。今の竹生島は、この時から出來たといふことを、もう千年も前の人がいひ傳へてをりました。（古風土記逸文考證。滋賀縣東淺井郡竹生村）

大和では天香久山と耳成山とが、畝傍山のために喧嘩をした話が、古い奈良朝の頃の歌に殘つてをります。それとよく似た傳説は、奥州の北上川の上流にもありまして、岩手山と早地峯山とは、今でも仲が好くないやうにいつてをります。汽車で通つて見ますと二つのお山の間に、姫神山といふ美しい孤山が見えます。爭ひはこの姫神山の取り合ひであつたともいへば、或はその反對に岩手山は姫神をにくんで、送り山といふ山にいひつけて、遠くへ送らせようとしたのに、送り山はその役目をはたさなかつたので、怒つて劒を拔いてその頸をきつた。それが今でも岩手山の右の脇に載つてゐる小山だともいひました。（高木氏の日本傳説集。岩手縣岩手郡瀧澤村）

日本人は永い年月の間に、だん〳〵と遠い國から移住して來た民族です。昔一度かういふ話を聽いたことのある者の子や孫が、もう前のことは忘れかかつた頃に、知らず識らず似たやうな想像をしたといふだけで、わざとよその土地の傳説を眞似ようとしたのではありますまいが、山が右左に高くそびえて、何か爭ひでもしてゐるやうに思はれる場合が、行く先々の村里の景色にはあるので、それをぢつと眺めてゐて、幾度でもこんな昔話をし出したものと見えます。

青森の市の東にある東嶽なども、昔八甲田山と喧嘩をして斬られて飛んだといつて、胴ばかりのやうな山であります。その頸が遠く飛んで岩木山の上

に落ち、岩木山の肩には瘤みたいな小山が一つついてゐるのが、その東嶽の頸であつたといふ人があります。津輕平野の土地が肥えてゐるのは、その時の血がこぼれてゐるからだともいひます。さうして岩木山と八甲田山とは、今でも仲が好くないといふ話もあります。（同上。青森縣東津輕郡東嶽村）

出羽の鳥海山は、もと日本で一番高い山だと思つてゐました。ところが人が來て、富士山の方がなほ高いといつたので、口惜しくて腹を立てて、ゐても立つてもゐられず、頭だけ遠く海の向うへ飛んで行つた。それが今日の飛島であるといひます。飛島は海岸から二十マイルも離れた海の中にある島ですが、今でも鳥海山と同じ神樣を祀つてをります。これには必ず深いわけのあることゝ思ひますけれども、かういふ變つた昔話より他には、もう昔のことは何一つも傳はつてをりません。（鄕土研究三編。山形縣飽海郡飛島村）

負けることの嫌ひな者は、決して山ばかりではありませんでした。全體に

日本では、輕々しく人の優劣を說くのは惡いことゝしてありましたが、交通がだん〳〵開けて來ると、どうしてもさういふ評判をしなければならぬ場合が多く、それをまた大へんに氣にする古風な考へが、神にも人間にも少くなかつたやうであります。阿波の海部川の水源には、轟きの瀧、一名を王餘魚の瀧といふ大きな瀧があつて、山の中に王餘魚明神といふ社がありました。この瀧の近くに來て、紀州熊野の那智の瀧の話をすることは禁物でありました。那智の瀧とどちらが大きいだらうといつたり、またはこの瀧の高さを測つて見ようとしたりすると、必ず神のたゝりがあつたといふのは、多分この方が那智よりも少し小さかつたためであらうと思ひます。（鹽下錄。德島縣海部郡川上村平井）

橋などは、殊に遠方の人が多く通行するので、毎度他の土地の橋の噂を聽くことがあつたらうと思ひますが、それを非常に嫌ふといふ話が多いのであ

ります。橋の神は、至つてねたみ深い女の神様であるといつてをりました。

甲府の近くにある國玉の大橋などは、橋の長さが、もとは百八十間もあつて、甲斐國では、一番大きな、また古い橋でありましたが、この橋を渡る間に猿橋のうはさをすることゝ、野宮といふうたひをうたふことゝが禁物で、その戒めを破ると、必ずおそろしいことがあつたといひました。今でも土地の人だけは、決してさういふことはせぬであらうと思ひます。猿橋は小さいけれども、日本にも珍しいといふ見事な橋でありますから、それと比べられることを、この大橋が好まなかつたのであります。さうして野宮は、女のねたみを同情したうたひでありました。（山梨縣町村誌。山梨縣西山梨郡國里村國玉）

九州の南の端、薩摩の開聞岳の麓には、池田といふ美しい火山湖がありました。ほんの僅な陸地によつて海と隔てられ、小高い所に立てば、海と湖水とを一度に眺めることも出來るくらゐですが、大洋と比べられることを、池田

の神は非常にきらひました。さうして湖水の近くに來て、海の話や、舟の話をする者があると、すぐに大風、高浪がたつて、物すごい景色になつたといふことであります。（三國名所圖會。鹿兒島縣桀宿郡指宿村）

湖水や池沼の神は、多くは女性でありましたから、獨隱れて世の中のねたみも知らずに、靜かに年月を送ることも出來ました。山はこれとちがつて、多くの人に常に遠くから見られてゐますために、どうしても爭はなければならぬ場合が多かつたやうであります。

豐後の由布嶽は、九州でも高い山の一つで、山の姿が雄々しく美しかつた故に、土地では豐後富士ともいつてをります。昔西行法師がやつてきて、暫く麓の天間といふ村にゐた頃に、この山を眺めて一首の歌を詠みました。

豐國の由布の高根は富士に似て
雲もかすみもわかぬなりけり

さうするとたちまちこの山が鳴動して、盛んに噴火をし始めたので、これはいひ方が惡かつたと心づいて、

駿河なる富士の高根は由布に似て
雲も霞もわかぬなりけり

と詠み直したところが、ほどなく山の燒けるのがしづまつたといふ話であります。西行法師といふのは間違ひだらうと思ひますが、とにかく古くからかういふ話が傳はつてをりました。（鄕土研究一編。大分縣速見郡南畦村天間）

もとはほんたうにあつたことのやうに思つてゐた人もあつたのかも知れません。さうでなくとも、よその山の高いといふ噂をすることは、なるたけひかへるやうにしてゐたらしいのであります。多くの昔話はそれから生れ、また時としてそれをまじないに利用する者もありました。例へば昔日向國の人は、癰といふできものの出來た時に、吐濃峯といふ山に向つてかういふ言葉

を唱へて拜んださうであります。私は常にあなたを高いと思つてゐましたが、私のできものが今ではあなたよりも高くなりました。もしお腹が立つならば、早くこのできものを引つ込ませて下さいといつて、毎朝一二度づつ杵のさきをそのおできに當てると、三日めには必ず治るといつてをりました。これも山の神が自分より高くならうとする者をにくんで、急いでその杵をもつてたたき伏せるやうに、かういふ珍しい呪文を唱へたものかと思ひます。（塵袋七。宮崎縣兒湯郡都農村）

山が背くらべをしたといふ古い言ひ傳へなども、後には兒童ばかりが笑つてきく昔話になつてしまひました。さうしてだん〳〵に話が面白くなりました。肥後の飯田山は熊本の市から、東へ三四里ほども離れてゐる山ですが、市の西に近い金峯山といふ山と、高さの自慢から喧嘩をしたといつてをります。いつまで爭つて見ても勝負がつかぬので、兩方の山の頂上に樋をかけ渡

して、水を流して見ようといふことになりました。さうすると水が飯田山の方へ流れて、この山の方が低いといふことが明かになりました。その時の水が溜つたのだといつて、山の上には今でも一つの池があるさうです。これには閉口をして、もう今からそんなことは「いひ出さん」といつた故に、山の名をいひださんといふやうになつたとも申します。（高木氏の日本傳說集。熊本縣上益城郡飯野村）

尾張小富士といふ山は、尾張國の北の境、入鹿の池の近くにある小山ですが、山の姿が富士山とよく似てゐるので、土地の人たちに尊敬せられてゐます。それがお隣りの本宮山といふ山と高さ比べをして、やはり樋を掛け水を通して見たといふ話が傳はつてをります。さうして見た結果が、小富士の方の負けになりました。毎年六月一日のお祭りの日に、麓の村の者が石をひいてこの山に登ることになつたのは、少しでもお山の高くなることを、山の神

樣が喜ばれるからだといふ話であります。（日本風俗志。愛知縣丹羽郡池野村）

これと同じやうな傳說は、また加賀の白山にもありました。白山は富士の山と高さ競べをして、勝負をつけるため樋を渡して水を通しますと、白山が少し低いので、水は加賀の方へ流れようとしました。それを見てゐた白山方の人が、急いで自分の草鞋をぬいで、それを樋の端にあてがつたところが、それでちやうど双方が平になつた。それ故に今でも白山に登る者は必ず片方の草鞋を山の上に、ぬいで置いて歸らねばならぬのださうです。（趣味の傳說。石川縣能美郡白峰村）

樋を掛けたといふことはまだきゝませんが、越中の立山も白山と背競べをしたといふ話があります。ところが立山の方が、ちやうど草鞋の一足分だけ低かつたので、非常にそれを殘念がりました。それから後は、立山に參詣する人が、草鞋を持つて登れば、特に大きな御利益を授けることにしたといつ

てをります。（郷土研究一編。富山縣上新川郡）

それから越前の飯降山、これは東隣の荒島山と背くらべをして、馬の沓の半分だけ低いことがわかつたさうであります。それ故にこの山でも、石を持つて登る者には、一つだけは願ひごとがかなふといつて、毎年五月五日の山登りの日には、必ず石をもつて行くことになつてをります。（同上。福井縣大野郡大野町）

三河の本宮山と、石卷山とは、豐川の流れを隔てゝ西東に、今でも大昔以來の丈くらべを續けてゐますが、この二つの峯は、寸分も高さの差がないといふことであります。それで兩方ともに石を手に持つて登れば少しも草臥れないが、これと反對に小石一つでも持つて降ると、參詣はむだになり、神罰が必ずあるといひます。つまり低くなることを非常に嫌ふのであります。（越味の傳說。愛知縣八名郡石卷村）

有名な多くの山々では、みんなが背くらべのためではなかつたかも知れませんが、非常に土や石を大切にして、それを持つて行くことをいやがりました。山に草鞋を殘して來る習慣は、今でもまだ方々に行はれてをります。白山や立山にはあんな昔話がありますが、世間にはもつと眞面目に、その理由を考へてゐた者も多かつたのであります。例へば奥州金華山の權現は、山の土が草鞋について、島から外へ出ることを惜しまれるといふことで、參詣した者は、必ずそれをぬぎ捨てゝから船に乘りました。（笈埃隨筆。宮城縣牡鹿郡鮎川村）

富士山のやうな大きな山でも、やはり山の土を遠くへ持つて行かれぬやうに、麓に砂振ひといふ所があつて、以前は、必ずそこで古い草鞋をぬぎかへました。さうして登山者が、踏み降した須走口の砂は、その夜のうちに再び山の上へ歸つて行くともいひました。

伯耆の大山でも、山の下の砂が、日が暮れると峯に上り、朝はまた麓に下

るといつてをります。山をうやまひ、山の力を信じてゐた人たちには、それくらゐのことは當り前であつたかも知れませんが、それでも出來るだけ皆で注意をして、少しでも山を低くせぬやうに努めてゐたのであります。富士の行者は山に登る時に特に歩みをつゝしんで石などを踏み落さぬやうにしてゐたさうですし、また近江國の土を持つて來て、お山に納める者もあつたさうであります。富士は皆様も御存じの通り、大昔近江の土が飛んで、一夜に出來た山だといひ傳へてゐますので、それを今もとの國の土をもつて、少し繼ぎ足さうとしたのであります。

神いくさ

日本一の富士の山でも、昔は方々に競爭者がありました。人が自分々々の土地の山を、あまりに熱心に愛する爲に、山も競爭せずにはゐられなかつたのかと思はれます。古いところでは、常陸の筑波山が、低いけれども富士よりも好い山だといつて、そのいはれを語り傳へてをりました。大昔御祖神が國々をお巡りなされて、日の暮れに富士に行つて一夜の宿をお求めなされた時に、今日は新嘗の祭りで家中が物忌みをしてゐますから、お宿は出來ませぬといつて斷りました。筑波の方ではそれと反對に、今夜は新嘗ですけれども構ひません。さあ〳〵お泊り下さいとたいそうな御馳走をしました。神様

は非常に御喜びで、この山永く榮え人常に來り遊び、飲食歌舞絶ゆる時もないやうにと、めでたい多くの祝ひ言を、歌に詠んで下されました。筑波が春も秋も青々と茂つて、男女の樂しい山となつたのはその爲で、富士が雪ばかり多く、登る人も少く、いつも食物に不自由をするのは、新嘗の前の晩に大切なお客樣を、歸してしまつた罰だといつてをりますが、これは疑ひもなく筑波の山で、樂しく遊んでゐた人ばかりが、語り傳へてゐた昔話なのであります。（常陸國風土記。茨城縣筑波郡）

富士と淺間山が煙りくらべをしたといふ話も、ずゐぶん古くからあつた樣ですが、それはもう殘つてをりません。不思議なことには富士の山で祀る神を、以前から淺間大神と稱へてをりました。富士の競爭者の筑波山の頂上にも、どういふわけでか淺間樣が祀つてあります。それから伊豆半島の南の端、雲見の御嶽山にも淺間の社といふのがありまして、この山も富士と非常に仲

が惡いといふ話でありました。いつの頃からいひ始めたものか、富士山の神は木花開耶媛、この山の神はその御姉の磐長媛で、姉神は姿が醜かつた故に神樣でもやはり御嫉みが深く、それでこの山に登つて富士のうはさをすることが、出來なかつたといふのであります。（伊豆志其他。靜岡縣賀茂郡岩科村雲見）

ところがこれから僅二里あまり離れて、下田の町の後には、下田富士といふ小山があつて、それは駿河の富士の妹神だといつてをります。さうして姉樣よりも更に美しかつたので、顏を見合せるのが厭で、間に天城山を屏風のやうにお立てになつた。それだから奥伊豆はどこからも富士山が見えず、また美人が生れないと、土地の人はいふさうであります。おほかたもと一つの話が、後にかういふ風に變つて來たものだらうと思ひます。（鄕土研究一編。同縣同郡下田町）

越中舟倉山の神は姉倉媛といつて、もと能登の石動山の伊須流伎彦の奥方

であつたさうです。その伊須流伎彦が後に能登の杣木山の神、能登媛を妻になされたので、二つの山の間に嫉妬の爭ひがあつたと申します。布倉山の布倉媛は姉倉媛に加勢し、甲山の加夫刀彦は能登媛を援けて、大きな神戰となつたのを、國中の神々が集つて仲裁をなされたと傳へてをります。一說には毎年十月十二日の祭りの日には、舟倉と石動山と石合戰があり、舟倉の權現が礫を打ちたまふ故に、この山の麓の野には小石がないのだともいつてをりました。（肯構泉達錄等。富山縣上新川郡船崎村舟倉）

これと反對に、阿波の岩倉山は岩の多い山でありました。それは大昔この國の大瀧山と、高越山との間に戰爭があつた時、双方から投げた石がこゝに落ちたからといつてをります。さうして今でもこの二つの山に石が少いのは、互にわが山の石を投げ盡したからだといふことであります。（美馬郡鄕土誌。德島縣美馬郡岩倉村）

それよりも更に有名な一つの傳說は、野州の日光山と上州の赤城山との神戰でありました。古い二荒神社の記錄に、くはしくその合戰のあり樣が書いてありますが、赤城山はむかでの形を現して雲に乘つて攻めて來ると、日光の神は大蛇になつて出ててたゝかつたといふことであります。さうして大蛇はむかでにはかなはぬので、日光の方が負けさうになつてゐた時に、猿丸太夫といふ弓の上手な青年があつて、神に賴まれて加勢をして、しまひに赤城の神をおひ退けた。その戰をした廣野を戰場が原といひ、血は流れて赤沼となつたともいつてをります。誰が聞いても、ほんたうとは思はれない話ですが、以前は日光の方ではこれを信じてゐたと見えて、後世になるまで、毎年正月の四日の日に、武射祭りと稱して神主が山に登り赤城山の方に向つて矢を射放つ儀式がありました。その矢が赤城山に屆いて明神の社の扉に立つと、氏子たちは矢拔きの餅といふのを供へて、扉の矢を拔いてお祭りをする

さうだなどといつてをりましたが、果してそのやうなことがあつたものかどうか。赤城の方の話はまだわかりません。（二荒山神傳。日光山名跡志等）

しかし少くとも赤城山の周圍においても、この山が日光と仲が悪かつたこと、それから大昔神戰があつて、赤城様が負けて怪我をなされたことなどをいひ傳へてをります。利根郡老神の溫泉なども、今では老神といふ字を書いてゐますが、もとは赤城の神が合戰に負けて、逃げてこゝまで來られた故に、追神といふことになつたともいひました。（上野志。群馬縣利根郡東村老神）

それからまた赤城明神の氏子だけは、決して日光には詣らなかつたさうであります。赤城の人が登つて來ると必ず山が荒れると、日光ではいつてをりました。東京でも牛込はもと上州の人の開いた土地で、そこには赤城山の神を祀つた古くからの赤城神社がありました。この牛込には德川氏の武士が多くその近くに住んで、赤城様の氏子になつてゐましたが、この人たちは日光

に詣ることが出來なかつたさうであります。もし何か役目があつて、ぜひ行かなければならぬ時には、その前に氏神に理由を告げて、その間だけは氏子を離れ、築土の八幡だの市谷の八幡だのゝ、假の氏子になつてから出かけたといふことであります。（十方庵遊歷雜記）

奥州津輕の岩木山の神様は、丹後國の人が非常にお嫌ひだといふことで、知らずに來た場合でも必ず災がありました。昔は海が荒れたり惡い陽氣の續く時には、もしや丹後の者が入り込んではゐないかと、宿屋や港の船を片端からしらべたさうであります。これはこの山の神がまだ人間の美しいお姫様であつた頃に、丹後の由良といふ所でひどいめにあつたことがあつたから、そのお怒が深いのだといつてをりました。（東遊雜記その他）

信州松本の深志の天神様の氏子たちは、島内村の人と緣組みをすることを避けました。それは天神は菅原道眞であり、島内村の氏神武の宮は、その競

爭者の藤原時平を祀つてゐるからだといふことで、嫁婿ばかりでなく、奉公に來た者でも、この村の者は永らくゐることが出來なかつたさうであります。

（鄉土研究二編。長野縣東筑摩郡島內村）

時平を神に祀つたといふお社は、また下野の古江村にもありました。これも隣りの黑袴といふ村に、菅公を祀つた鎭守の社があつて、前からその村と仲が惡かつたゆゑに、かういふ想像をしたのではないかと思ひます。この二つの村では、男女の緣を結ぶと、必ず末がよくないといつてゐたのみならず、古江の方では庭に梅の木を植ゑず、また襖屏風の繪に梅を描かせず、衣服の紋樣にも染めなかつたといふことであります。（安蘇史。栃木縣安蘇郡犬伏町黑袴）

下總の酒酒井大和田といふあたりでも、よほど廣い區域にわたつて、もとは一箇所も天滿宮を祀つてゐませんでした。その理由は鎭守の社が藤原時平で、天神の敵であるからだといひましたが、どうして時平大臣を祀るやうに

なつたかは、まだ說明せられてはをりません。（津村氏譚海。千葉縣印旛郡酒酒井町）

丹波の黑岡といふ村は、もと時平公の領分であつて、そこには時平屋敷があり、その子孫の者が住んでゐたことがあるといつてゐました。それはたしかな話でもなかつたやうですが、この村でも天神を祀ることが出來ず、たまたま畫像をもつて來る者があると、必ず旋風が起つてその畫像を空に卷き上げ、どこへか行つてしまふといひ傳へてをりました。（廣益俗說辨殘編。兵庫縣多紀郡城北村）

何か昔から、天神樣を祀ることの出來ないわけがあつて、それがもう不明になつてゐるのであります。それだから村に社があれば藤原時平のやうに、生前菅原道實と仲が惡かつた人の、社であるやうに想像したものかと思ひます。鳥取市の近くにも天神を祀らぬ村がありましたが、そこには一つの古塚があつて、それを時平公の墓だといつてをりました。こんな所に墓があるは

ずはないから、やはり後になつて誰かゝ考へ出したのであります。（遠碧軒記。鳥取縣岩美郡）

しかし天神と仲が善くないといつた社は他にもありました。例へば京都では伏見の稲荷は、北野の天神と仲が惡く、北野に參つたと同じ日に、稲荷の社に參詣してはならぬといつてゐたさうであります。その理由として説明せられてゐたのは、今聞くとをかしいやうな昔話でありました。昔は三十番神といつて京の周圍の神々が、毎月日をきめて禁中の守護をしてをられた。菅原道眞の靈が雷になつて、御所の近くに來てあばれた日は、ちやうど稲荷大明神が當番であつて、雲に乘つて現れてこれを防ぎ、十分にその威力を振はせなかつた。それゆゑに神に祀られて後まで、まだ北野の天神は稲荷社に對して、怒つてゐられるのだといふのでありますが、これももちろん後の人がいひ始めたことに相違ありません。（溪嵐拾葉集。載恩記等）

或はまた天神様と御大師様とは、仲が惡いといふ話もありました。大師の緣日に雨が降れば、天神の祀りの日は天氣がよい。二十一日がもし晴天ならば、二十五日は必ず雨天で、どちらかに勝ち負けがあるといふことを、京でも他の田舍でもよくいつてをります。東京では虎の門の金毘羅様と、蠣殼町の水天宮様とが競爭者で、一方の緣日がお天氣なら他の一方は大抵雨が降るといひますが、たとひそんなはずはなくても、なんだかさういふ氣がするのは、多分は隣り同士の二箇所の社が、互に相手にかまはずには、獨で繁昌することが出來ぬやうに、考へられてゐた結果であらうと思ひます。

だから昔の人は氏神といつて、殊に自分の土地の神様を大切にしてをりました。人がだん〳〵遠く離れたところまで、お參りをするやうになつても、信心をする神佛は土地によつて定まり、どこへ行つて拜んでもよいといふわけには行かなかつたやうであります。同じ一つの神様であつても、一方では

榮え他の一方では衰へることがあつたのは、つまりは拜む人たちの競爭であります。京都では鞍馬の毘沙門樣へ參る路に、今一つ野中村の毘沙門堂があつて、もとはこれを福惜しみの毘沙門などといつてをりました。せつかく鞍馬に詣つて授かつて來た福を、惜しんで奪ひ返されるといつて、鞍馬參詣の人はこの堂を拜まぬのみか、わざと避けて東の方の脇路を通るやうにしてゐたといひます。同じ福の神でも祀つてある場所がちがふと、もう兩方へ詣ることは出來なかつたのを見ると、仲の善くないのは神樣ではなくて、やはり山と山との背競べのやうに、土地を愛する人たちの負け嫌ひが元でありました。松尾のお社なども境內に熊野石があつて、こゝに熊野の神樣がお降りなされたといふ話があり、以前はそのお祭りをしてゐたかと思ふにも拘らず、こゝの氏子は紀州の熊野へ參つてはならぬといふことになつてゐました。それから熊野の人もけつして松尾へは參つて來なかつたさうで、このいましめ

を破ると必ずたゝりがありました。これなども多分双方の信仰が似てゐたために、かへつて二心を憎まれることになつたものであらうと思ひます。（都名所圖會拾遺。日次記事）

どうして神樣に仲が惡いといふやうな話があり、お參りすればたゝりを受けるといふ者が出來たのか。それがだん〳〵にわからなくなつて、人は歷史をもつてその理由を說明しようとするやうになりました。例へば横山といふ苗字の人は、常陸の金砂山に登ることが出來ない。それは昔佐竹氏の先祖がこの山に籠城してゐた時に、武藏の横山黨の人たちが攻めて來て、城の主が沒落することになつたからだといつてゐますが、この時に鎌倉將軍の命をうけて、從軍した武士はたくさんありました。横山氏ばかりがいつまでもにくまれるわけはないから、これには何か他の原因があつたのであります。（楓軒雜記。茨城縣久慈郡金砂村）

東京では神田明神のお祭りに、佐野氏の者が出て來ると必ずわざはひがあつたといひました。神田明神には平將門の靈を祀り、佐野はその將門を攻めほろぼした俵藤太秀郷の後裔だからといふのであります。下總成田の不動様は、秀郷の守り佛であつたといふ話でありますが、東京の近くの柏木といふ村の者は、けつして成田には參詣しなかつたさうであります。それは柏木の氏神鎧大明神が、やはり平將門の鎧を御神體としてゐるといふいひ傳へがあつたからであります。（共古日錄。東京府豐多摩郡淀橋町柏木）

信州では諏訪の附近に、守屋といふ苗字の家がたくさんにありますが、この家の者は善光寺にお詣りしてはいけないといつてをりました。强ひて參詣すると災難があるなどともいひました。それはこの家が物部守屋連の子孫であつて、善光寺の御本尊を難波堀江に流し捨てさせた發頭人だからといふのでありますが、これも恐らくは後になつて想像したことで、守屋氏はもと

諏訪の明神に仕へてゐた家であるゆゑに、他の神佛を信心しなかつたまでゝあらうと思ひます。（松屋筆記五十。長野縣長野市）

天神のお社と競爭した隣りの村の氏神を、藤原時平を祀るといつたのは妙な間違ひですが、これとよく似た例はまた山々の背くらべの話にもありました。富士と仲の惡い伊豆の雲見の山の神を、磐長媛であらうといふ人があると、一方富士の方ではその御妹の、木花開耶媛を祀るといふことになりました。どちらが早くいひ始めたかはわかりませんが、とにかくにこの二人の姫神は姉妹で、一方は美しく一方はみにくゝ、嫉みからお爭ひがあつたやうに、古い歷史には書いてあるので、かういふ想像が起つたのであります。伊勢と大和の國境の高見山といふ高い山は、吉野川の川下の方から見ると、多武峰といふ山と背くらべをしてゐるやうに見えますが、その多武峰には昔から、藤原鎌足を祀つてをりますゆゑに、高見山の方には蘇我入鹿が祀つてあると

いふやうになりました。入鹿をこのやうな山の中に、祀つて置くはずはないのですが、この山に登る人たちは多武峰の話をすることが出來なかつたばかりでなく、鎌足のことを思ひ出すからといつて、鎌を持つて登ることさへもいましめられてをりました。そのいましめを破つて鎌を持つて行くと、必ず怪我をするといひ、または山鳴りがするといつてをりました。（卽事考。奈良縣吉野郡高見村）

この高見山の麓を通つて、伊勢の方へ越えて行く峠路の脇に、二丈もあるかと思ふ大岩が一つありますが、土地の人の話では、昔この山が多武峰と喧嘩をして負けた時に、山の頭が飛んでこゝに落ちたのだといつてをります。さうして見ると蘇我入鹿を祀るよりも前から、もう山と山との爭ひはあつたので、その爭ひに負けた方の山の頭が、飛んだといふ點も羽後の飛島、或は常陸の石那阪の山の岩などと、同樣であつたのであります。どうしてこんな

傳說がそこにもこゝにもあるのか。そのわけはまだくはしく說明することが出來ませんが、ことによると負けるには負けたけれども、それは武藏坊辨慶が牛若丸だけに降參したやうなもので、負けた方も決して平凡な山ではなかつたと、考へてゐた人が多かつた爲かも知れません。ともかくも山と山との背くらべは、いつでも至つて際どい勝ち負けでありました。それだから人は二等になつた山をも輕蔑しなかつたのであります。日向の飯野鄕といふところでは、高さ五尋ほどの岩が野原の眞中にあつて、それを立石權現と名づけて拜んでをりました。そこから遠くに見える狗留孫山の絕頂に、卒都婆石、觀音石といふ二つの大岩が竝んでゐて、昔はその高さが二つ全く同じであつたのが、後に觀音石の頸が折れて、神力をもつて飛んでこの野に來て立つた。それ故に今では低くなりましたけれども、人はかへつてこの觀音石の頭を拜んでゐるのであります。（三國名所圖會。宮崎縣西諸縣郡飯野村原田）

肥後の山鹿では下宮の彦嶽權現の山と、蒲生の不動岩とは兄弟であつたといつてをります。權現は繼子で母が大豆ばかり食べさせ、不動は實子だから小豆を食べさせてゐました。後にこの兄弟の山が綱を首に掛けて首引きをした時に、權現山は大豆を食べてゐたので力が強く、小豆で養はれた不動岩は負けてしまつて、首をひき切られて久原といふ村にその首が落ちたといつて、今でもそこには首岩といふ岩が立つてゐます。搖ぎ嶽といふ岩はそのまん中に立つてゐて、首ひきの綱に引つ掛かつてゆるいだから搖嶽、山に二筋のくぼんだところがあつて、そこだけ草木の生えないのを、綱ですられた痕だといひ、小豆ばかり食べてゐたといふ不動の首岩の近くでは、今でもそのために土の色が赤いのだといふさうであります。（肥後國志等。熊本縣鹿本郡三玉村）

傳說と兒童

諸君の家のまはり、毎日あるいてゐる道路のかたはらにも、もとはこれよりもつと面白い傳說が、いくらともなく殘つてゐたのであります。學校に行く人たちがいそがしくなつて、暫くかまはずに置くうちに、もう覺えてゐて話してくれる人がゐなくなりました。それから美しい沼が田になり、見事な大木が枯れて片付けられてしまふと、當分はそのうはさをすることがかへつて多いけれども、後に生れた者には感じが薄いので、おひ〳〵に忘れて行くやうになるのであります。村などはこのために大分さびしくなりました。

傳說は、今までかなり久しい間、子供ばかりをきゝ手にして話されてをり

ました。尤も大人も脇にゐてきいてはゐるのですが、大抵はおさらひをするをりがないために、子供のやうに永く記憶して、ずつと後になつてから、また他の人に話してやる程に、熱心にはならなかつたのであります。子供のおさらひは、その木の下で遊び、またはみんなと連れだつて、その岩の前や淵の上、池の堤をたゞ通つて行くことでありました。話は不得手だから誰もくはしくは話しませんが、その度毎に一同は前にきいたことを想ひ出して、暫くは同じやうな心持ちになつて、互に眼を見合ふのであります。人が年を取つて話をすることが好きになり、また上手になつて後に、昔のことだといつてきかせる話は、大方は、かうした少年の頃に、覺えこんだ話だけでありました。だからどんな老人の教へてくれる傳說にも、必ずある時代の兒童が關係してをります。さうしてもし兒童が關係をしなかつたら、日本の傳說はもつと早くなくなるか、または面白くないものばかり多くなつてゐたに違ひな

いのであります。

だから皆さんが若いうちに、きいて置く話が少くなり、またそれを覺えてゐることがだん〳〵にむづかしくなると、書物をその年寄りたちの代りに、賴むより外はないのであります。書物には大人にきかせるやうな話、大人が珍しがるやうな話が多いのでありますが、今ではこの中からでないと、昔の兒童の心持ちを、知ることは出來ぬやうになりました。國が全體にまだ年が若く、誰でも少年の如くいき〳〵とした感じをもつて、天地萬物を眺めてゐた時代が、かつて一度は諸君の間にばかり、續いてゐたこともありました。書物は廻り廻つてそれを今、再び諸君に語らうとしてゐるのであります。

もとは小さな人たちは繪入りの本を讀むやうに、目にいろ〳〵の物の姿を見ながら、古くからのいひ傳へをきいたり思ひ出したりしてゐたのであります。垣根の木に來る多くの小鳥は、その啼き聲のいはれを說明せられてゐる

間、そこいらを飛びまはつて話の興を添へました。路のほとりのさまざまの石佛なども、昔話を知つてゐる子供等には、うなづくやうにも又ほゝゑむやうにも見えたのであります。其中でも年をとつてから後にその頃のことを考へる者に、一番懐かしかつたのは地藏樣でありました。大きさが大抵は十一二の子供くらゐで、顏は佛さまといふよりも、人間の誰かに似てゐるので見覺えがありました。さうしてまた多くの傳說の管理者だつたのであります。

村毎に別の話、一つ〳〵の名前を持つてゐたのも、石地藏に最も多かつたやうであります。かういふ兒童の永年の友だちが、いつの間にかゐなくなりさうですから、こゝには百年前の子供等に代つて、書物に殘つてゐる三つ四つの話をしてみませう。古くから有名であつたのは、箭負ひ地藏に身代り地藏、信心をする者の身代りになつて、後に見ると背中に敵の矢が立つてゐたなどといふ地藏ですが、これはまだその人だけの不思議であります。土地に

緣の深い地藏樣になると、特に賴まずとも村のために働いて下さるといつて、むしろ意外な出來事があつてから後に、拜みに來る者がかへつて多くなるので、その中でも、ことに地藏は、農業に對して同情が厚いといふことが、一同の感謝するところでありました。足洗はずの地藏といふのは、時々百姓の姿になつて、いそがしい日に手傳ひに來て下さる。水引き地藏は田の水の足りない時に、そつと溝を切つてこちらの田だけに水を引き、そのために隣りの村からうらまれるやうなこともありましたが、それが地藏の仕業だとわかると、怒る者はなくなつて、たゞ感心するばかりでありました。

鼻取地藏といふのもまた農民の同情者で、東日本では多くの村に祀つてをります。私の今ゐる家から一番近いのは、上作延の延命寺の鼻取地藏、荒れ馬をおとなしくさせるのが御誓願で、北は奥州南部の邊までも、音に聞えた地藏でありました。昔この村の田植ゑの日に、名主の家の馬が荒れて困つて

ゐると、見馴れぬ小僧さんがたゞ一人來て、その口を取つてくれたらすぐに靜かになつた。次ぎの日、寺の和尚がお經を讀まうとして行つて見ると、御像の足に泥がついてゐる。それで昨日の小僧が地藏樣であつたことが知れて、大評判になつたといふことです。（新編武藏風土記稿。神奈川縣橘樹郡向丘村上作延）

ところがまた八王寺の極樂寺といふ寺でも、これは地藏ではないが、本尊の阿彌陀樣を、鼻取如來と呼んでをりました。昔この近所にあつた寺の田を、百姓がなまけて耕してくれぬので困つてをると、これも小僧が現れて、馬の鼻をとつて助けたといつてをります。どういふわけでかこの阿彌陀如來は、唇が開き齒が見えて、ちよつと珍しい顏の佛樣であるので、一名を齒ふき佛とも稱へたさうであります。（同上。東京府八王子市子安）

駿河の宇都谷峠の下にある地藏尊は、聖德太子の御作だといふのに、これも鼻取地藏といふ異名がありました。かつて榛原郡の農家で牛の鼻とりをして手傳つてくれられたといふことで、願ひごとのある者は、鎌を持つて來て獻納したといふのは、農業がお好きだと思つてゐたからでありませう。ある時はまた日光山のお寺の食責めの式へ出かけて、盛んに索麪を食べたといつて、索麪地藏といふ名前も持つてをられたさうです。（駿國雜志。靜岡縣安倍郡長田村字都谷）

鼻取りといふのは、六尺ばかりの棒であります。牛馬を使つて田をうなふ時に、この棒を口の所に結はへて引き廻るのです。今ではそれを用ひる農家が、東北の方でも、だん〳〵少くなりましたが、田植ゑの前の非常に忙がしい時に、もとはこの鼻とりに別の人手がかゝるので、仕方なしに多くは少年がその役に使はれ、うまく出來ないのでよく叱られてゐました。地藏が手傳ひに來てわざ〳〵さういふ爲事をして下さるといつたのは、まことに少年らしい夢であります。もとはかういふさゝの棒もなしに、直接に牛や馬の鼻の

綱をとりましたから、かれ等にはかなりつらい爲事でありましたが、もとも
と牛馬を田に使ふといふことが、東の方ではさう古くからではありません。
だからこれなども新しく出來た傳說であります。石城の長友の長隆寺の鼻取
地藏などは、ある農夫が代搔きの時に、ひどく鼻とりの少年を叱つてゐると、
どこからともなく別の子供がやつて來て、その代りをしてくれて、それは農
夫の氣に入りました。後で禮をしようと思つてさがしてみたが見えない。寺
の地藏堂の床の板に、小さな泥足の跡がついてをります。さては地藏が少年
の叱られるのをかはいさうに思つて、代つて鼻とりをつとめて下さつたのだ
と、後にわかつてあり難がつたといふ話であります。この地藏は安阿彌とか
の名作で、今では國寶になつてゐる大切なお像であります。（鄉土研究一編。福島
縣石城郡大浦村長友）

また福島の町の近くで、腰濱の天滿宮の隣りにある地藏にも同じ話があつ

て、お堂の名を鼻取庵といつてをりました。これも子供に化けて田の水を引
き、馬の鼻をとつて引き廻して手傳ひました。晝飯の時に連れて來て御馳走
をするつもりで、田からあがつて方々を尋ねたが見えない。尋ねまはつてお
堂の中にはひつて見ると、地藏の足に田の泥がついてゐたといふのであります。（信達一統志。福島縣福島市腰濱）

登米の新井田といふ部落では、昔隣りの郡から分家をして來た者が、七觀
音と地藏とを內神として持つて來て、屋敷に堂を建てゝていねいに祀つてを
りました。村の人たちもお參りをして拜んでゐましたが、農が忙しい頃には、
時々見たことのない子供がやつて來て、方々の家の鼻とりの加勢をしてくれ
ることがあつて、それがこの地藏樣だと皆思つてゐたさうで、代搔地藏と稱
へて今でも拜んでゐます。（登米郡史。宮城縣登米郡寶江村新井田）

それから安積郡の鍋山の地藏樣も、よく農業の手つだひをして下さるとい

ふ話があつて、わざ〳〵この村を開墾する際に、隣りの野田山から迎へて來たのださうです。（相生集）

地藏菩薩靈驗記といふ足利時代の書物にも、かういふ話はいろ〳〵と出てをります。出雲の大社の農夫が信心してゐた地藏樣は、十七八の青年に化けて、その農夫が病氣の時に、代りに出て來て、お社の田で働いたといふことです。あまりよく働くので奉行が感心して、食事の時に盃を一つやりました。喜んで酒を飲んで、その盃を頭の上にかぶり、後にどこへか歸つて行きました。翌日になつて、農夫がこのことをきゝ、もしやと思つて厨子の戸を開けて見ると、果して地藏樣が盃をかぶつて、足は泥だらけになつて立つてをられたといひます。近江の西山村の佐吉といふ百姓は、病氣で田の草もとることが出來ずにゐると、日頃信心の木本の地藏が、いつの間にか來て、すつかり草をとつて下さつた。朝のうち參詣の路で見た時には、あれほど生ひ

茂つてどうしようかと思つた田の草が、歸りに見るともう一つも殘らずとつてある。どうしたことかと思つて近くにゐた者に尋ねると、今のさき七十ばかりの老僧が、田の畔を一まはりあるいてゐられるのを見た他には、誰も來た人はないといふので、それでは地藏の御方便で助けて下さつたものであらうと、引き返してお堂へ行つて見ると、そこらあたりが一面に泥足の跡で、それがお厨子の中までも續いてゐたと書いてあります。

或はまた、田植ゑの頃に水喧嘩があつて、一人の農夫が怪我をして寢てゐると、夜の間に小僧さんが來て、その男の田に水を入れてゐる。それをにくむ者が後から箭を射かけると、逃げてどこかへいつてしまつた。後にこの家の地藏樣を拜まうとして見ると、背中に箭が立つて、田の泥が足についてゐた。かういふ水引地藏の話も古くからありました。また筑後國の田舍では、八講の米を作る田へ夜になると水を引く者がある。村の人が大勢出て見ると、

若い法師が杖をもつて田の水口に立ち、溝の水をかきまはしてゐるのが、月の光でよく見えました。杖を流れに入れて掻くやうにすれば、細い溝川が波を打つて、どう〳〵と上手へ流れ、水はことゞ〳〵くその田にはひりました。

これも箭を射られて後で見ると、地藏の背中に立つてゐたといひますが、その箭が山鳥の羽をもつてはいであつたといふのは、前に申した足利の片目清水と似てゐます。この不思議に恐れ入つて、その田を寄進してお寺を建て、それを矢田寺と名づけたといふことであります。

かういふ話は、地藏樣でなくても、或は上總の廬南の草取仁王だの、駿河の無量寺の早乙女の彌陀だの、秩父の野上の泥足の彌陀だのといふのが、そちこちの村にはあつたのですが、その中でも一番に人間らしく、また子供らしいことをなされたのが地藏でありました。佛敎の方でも、地藏尊は人を救ふために、どこへも行き誰とでもお附き合ひなさるといつて、つまらぬ旅僧

の姿で杖を持つて、始終あるいてゐられるやうに考へてゐますが、日本の話はそれだけではないやうであります。遠州の山の中のある村では、百姓が粟畑の夜番をするのに困つて、もしこの畑の番をして、鹿猿に食はさぬやうにして下されば、後に粟の餅をこしらへて上げませうと、石地藏に向つていひました。さうして置いてすつかり忘れてゐると、地藏が大そう腹を立てゝ、その男は病氣になりました。氣がついて驚いて粟の餅を持つて行つたら、すぐに全快したといふ話もあります。尾張の宮地太郎といふ武士が花見をしてゐると、山の地藏樣が山伏に化けて來てのぞきました。さうしてよび込まれて歌をよみ、烏帽子をかぶり鼓を打つて、お獅子を舞つたといふ話もあります。

またある所では、信心深い老人があつて、毎日夜明け前に門口に出て、地藏樣の村を廻つてあるかれるお姿を見ようとしてゐました。なん年かさうし

てゐるうちに、とう〳〵地藏樣を拜んだといふことであります。その樣子がまるで人間と少しもちがはなかつたといつてをります。地藏の夜遊びといふことは、多くの村できく話でありました。例へば埼玉縣の野島の淨山寺の片目地藏などは、あまりよく出て行かれるので、住職が心配して、背中に釘を打つて鎖でつないで置くと、たちまち罰が當つて惡い病にかゝつて死んだといひます。それからは自由に夜遊びをさせてゐたところが、ある時茶畠にはひつて茶の木で目を突いたといつて、今でもその木像は片目であります。またその目の傷を門前の池の水で洗つたといつて、今でもその池に住む魚は、悉く片目であるさうです。（十方庵遊歷雜記。埼玉縣南埼玉郡萩島村野島）

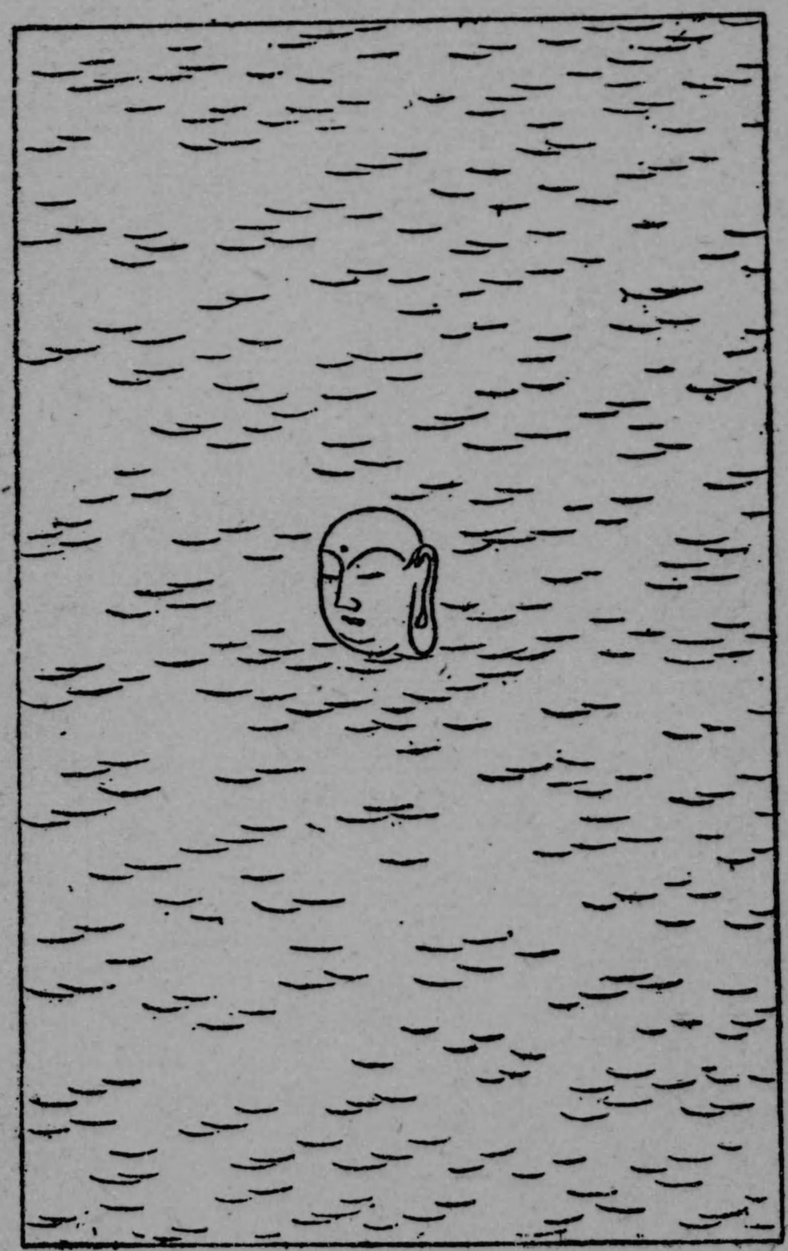
東京でも下谷金杉の西念寺に、眼洗地藏といふのがありました。それから鼻缺地藏だの鹽嘗地藏だのと、面白い名前が幾らもありました。夜更地藏、踊地藏、物いひ地藏などといふのもありますが、傳說はもう多くは殘つてを

りません。また時々は路傍の地藏で、いたづらをして旅人を困らせたといふ話もあります。相州大磯には化け地藏、一名袈裟切地藏といふのがもとはありました。伊豆の仁田の手無佛といふのも石地藏であつて、毎晩鬼女に化けて通行の者をおどしてゐるうちに、ある時强い若侍に出あつて、手を斬られて林の中へ逃げ込みました。翌朝行つて見ると、地藏の手が田の畔に落ちてゐたといふのもをかしな話であります。（伊豆志。靜岡縣田方郡函南村仁田）

しばられ地藏といふのにはいろ〳〵あつて、京都の壬生寺の繩目地藏などは、一つは身代り地藏でありました。武藏の住人香匂新左衞門、この寺にかくれて追手を受け、既に危いところを本尊の地藏が代つて下されて、しばつて來てからよく見ると、地藏尊であつたといふのは、そゝつかしい話であります。さうかと思ふと品川の願行寺のしばり地藏などは、願ひごとをする者が毎日來て、繩で上から上へとしばりました。それを一年に一度十夜の晩

に、寺の住職がすつかりほどいて置くと、次ぎの日からまたしばり始めるのでありました。（願掛重寶記。東京府荏原郡品川町南品川宿）

もとはこれなどは縄を結んだので、しばつたのではないやうであります。今でも神木とかお堂の戸の金網とかに、紙切れや絲紐を結びつけることがよくあつて、かうして人と神様との間に、連絡をつけようとしたらしいのであります。前に鼻取地藏の話をした上作延の村などにも、しばり松、一名聖松といふ大木がもとはあつて、願掛けをする人は縄を持つて來て、この松をしばりました。さうして願ひごとがかなふと、お禮に參つてその縄を解いたのであります。しばるといふために、何か惡いことでもしたやうに考へて、いろ〳〵の話が始まりました。龜井戸の天神の境内には、頓宮神といふ小宮があつて、その中には爺と婆との木像が置いてありました。その後には青赤二つ鬼が縄を持つて立つてゐます。頓宮神といふのはこの爺様のことで、昔菅



公が筑紫に流された時に、婆は親切であつたが、爺の方はまことにつらく當りました。それで今でもお參りをする人は、わざ〳〵鬼の持つてゐる縄で爺の體を卷き付けて天神に願掛けをする。さうして七日目にその縄を解くのだといつてをります。（同上。東京府南葛飾郡龜戸町）

雨乞ひの祈禱にも、よく石地藏はしばられました。羽後の花館の瀧宮明神は水の神で、御神體は昔は石の地藏でありました。これを土地の人は雨地藏、または雨戀地藏とも稱へて、旱の歳には長い綱をしばりつけて、石像を洪福寺淵に沈めて置くと、必ずそれが雨乞ひになつて雨が降るといひました。（月之出羽路。秋田縣仙北郡花館村）

所によつては、たゞ雨乞地藏の開帳をしただけで、雨が降るものと信じてゐた村もありますが、なか〳〵それだけでは降らぬので、をり〳〵はもつときついことをしたのであります。熊野の芳養村のどろ本の地藏尊などは、御

像を首の根まで川の水に浸して雨乞ひをしました。（郷土研究一編。和歌山縣西牟婁郡中芳養村）

播州船阪山の水掛地藏は、堂の脇にある古井の水を汲んで、その中で地藏を行水させ、後でその水を信心の人が飲みました。今では雨乞ひとは關係がないやうですが、この井戸もいかなるひでりでも涸れることがないといつてをります。（赤穗郡誌。兵庫縣赤穗郡船阪村高山）

肥前の田平村の釜が淵などでは、ひでりの時には土地の人が集つて來て、一しやう懸命になつて淵の水を汲み出します。深さが半分ばかりにも減ると、水の中に石の頭が見えて來るのを、地藏菩薩の御首といつてゐまして、それまで替へほして來ると、たいてい雨が降つたといふことです。（甲子夜話。長崎縣北松浦郡田平村）

かういふ雨乞ひのし方は、ずつと昔から日本にはあつたので、地藏はたゞ

外國からはひつて來て、後にその役目を引き繼いだばかりではないかと思ひます。

筑後の山川村の瀧の淵といふ所では、昔平家方のある一人の姫君が、入水してこの淵の主となり、今でも住んでをられる。それは驚くやうな大鯰だなどといつてをりますが、岸には七靈社といふほこらを建てゝ姫の木像が祀つてあります。ひでりの場合にはその像を取り出し、淵の水中に入れて置くのが、この土地の雨乞ひの方法でありました。（耶馬臺國探見記。福岡縣山門郡山川村）

大和の丹生谷の大仁保神社は、俗に御丹生さんといつて水の神で、また姫神であります。こゝでも雨乞ひには御神體を水の中に沈めて、少し待つてゐると必ず雨が降るといふことでありました。（高市郡志料、奈良縣高市郡船倉村丹生谷）

武藏の比企の飯田の石船權現といふのは、以前は船の形をした一尺五寸ばかりの石が御神體でありました。社の前にある御手洗の池に、この石を浸し

て雨を祈れば、必ず驗があると信じてゐましたが、どうしたものか後には御幣ばかりになつて、もうその石は見えなくなつたといひます。（新編武藏風土記稿。埼玉縣比企郡大河村飯田）

それから石地藏に、いろ〳〵の物を塗りつけること、これも佛法が持つて來た敎へではなかつたやうであります。雨乞ひのためにする例は、羽後の男鹿半島に一つあります。鳩崎の海岸に近く寢地藏といつてゐたのは、たゞ梵字を彫りつけた一つの石碑でありましたが、常には横にしてあつて、雨乞ひの時だけこれを立てゝ、石に田の泥を一面に塗ります。さうするときつと降るといつてをりました。（眞澄遊覽記。秋田縣南秋田郡北浦町野村）

これは恐らく泥で汚すと、洗はなければならぬから雨が降るのだと、思つてゐたのでありませうが、さうでなくても地藏には泥を塗りました。大和の二階堂の泥掛地藏などは毎月二十四日の御緣日に、今でも佛體に泥を掛けて

お祭りをしてゐます。（大和年中行事一覽。奈良縣山邊郡二階堂村）

油掛地藏といつて、參詣の人が油を掛けて拜む地藏もありました。大阪の近くの野中の觀音堂の脇には、墨掛地藏といふ眞黑な地藏さんがありました。願ひごとのかなうた人が、必ず墨汁を持つて來て掛けたのださうです。（浪華百事談）

羽前狩川の冷岩寺の前には、毛呂美地藏といふのもありました。以前普通の家でも酒を造ることが出來た頃に、この近所の者は、もろみといつて酒になりかけの米の汁を、先づ一杯だけくんで來て、地藏の頭から浴せる。それがだん〳〵と腐つて路を通る者が鼻をつまむ程臭かつたけれども、誰一人としてこれを洗ひ淨める者はなかつたさうです。昔ある農夫があまりきたない地藏樣だといつて、それをすつかり洗つて上げたところが、たちまち罰を被つて一家內疫病にかゝり、大きな難儀をしたといふ話もあり、おそれて手を

つける者がなかつたのであります。（鄉土研究二編。山形縣東田川郡狩川村）

それからまた、粉掛地藏といふのもたくさんあります。伊豫の道後の溫泉にあるものは、參詣の人が白粉を持つて來てふりかけました。その名を粉附地藏といひ、ほんたうは子好き地藏だらうといふ說もありましたが、たしかなことはどうせわかりません。（日本週遊奇談。愛媛縣溫泉郡道後湯之町）

駿河の鈴川の近くにも、小僧に化けたといふので有名な石地藏がありましたが、これもお祭りの時に白粉を塗つて化粧をしました。（田子之古道。靜岡縣富士郡元吉原村）

相模の弘西寺村の化粧地藏、これも願掛けをする人が白粉や、胡粉を地藏のお顏に塗つて拜みました。（新編相模風土記。神奈川縣足柄上郡南足柄村弘西寺）

近江の湖水の北の大音村の粉掛地藏は、このへんの工場で絲とりをする娘たちが、手が荒れた時には、米か麥の粉を一つかみ持つて來て、この地藏に

振り掛けると、さつそくよくなるといつてをります。（郷土研究四編。滋賀縣伊香郡伊香具村大音）

安藝の福成寺の虚空藏の御像には、附近の農民が常に麥の粉や、米の粉を持つて來て供へました。それはこの佛の御名を「粉喰ふぞ」といふのかと思つて、それならば粉を上げたら喜ばれるだらうといふことになつたとの話もありますが（碌々雜話）、これとてもはやくから粉を掛けてゐたために、一そうそんな説明が信じ易くなつたのかも知れません。とにかくに虚空藏は、地藏に對する言葉で、もとは兄弟のやうな仲であつたのですが、土に縁の深い地藏尊だけが、特別に農村の人氣を集めることになつたので、それには諸君のごとき若い人たちが、いつでもひいきをしてゐたことが大いなる力でありました。

京都ではもう古い頃から、毎年七月の二十四日には六地藏詣りといつて、

多くの人が近在の村を廻つてあるきました。村の方では休み所をつくつてお茶を出し、子供は路の傍の石佛を一つ所に集めて來ました。さうしてその顔を白く塗つてすべてこれを地藏と名づけ、花を立てゝ食べ物を供へて、町から來た人に拜ませました（山城四季物語）。私などの田舎でも、夏の夕方の地藏祭りは、村の子の最も樂しい時で、三角に結んで小豆飯の味は、年をとるまで誰でも皆よく覺えてゐます。

土地によつては寒い冬のなかばに、地藏の祭りをした所もあります。伯耆國のある村では、それを大師講といつて、十一月二十四日の夜の明けぬ前に、生の團子を持つて路の辻に行き、それを六地藏の石の像に塗りつけました。一番早く塗つて來た者は、大きくなつてから美しい嫁をもらひ、好い男を婿に取るといつてをりました。（霞村組合村是。鳥取縣日野郡霞村）

大阪天王寺の地藏祭りは、以前には舊の十一月の十六日でありました。こ

の朝早く子供たちは、米の粉を持つて來て地藏のお顏に塗り、その夕方にはまた藁火を焚いて、眞黑にいぶしました。さうして「明年の、明年の」とはやして、お別れの踊りを踊つたといふことであります。（浪華百事談）

人によつては、これを道祖神の祭りともいひました。道祖神は道祖神のことでありますが、これも少年と非常に仲の好い辻の神で、もとは地藏と一つの神であつたのですから、さういつても決して間違ひではありません。道祖神はたいていの所では、正月十五日にそのお祭りをしました。木で作つた場合にでも、やはり子供等は白いものを塗りました。東京から西に見える山の中の村などでは、この日のどんど燒きの火の中へ、石の道祖神を入れて黑くいぶしました。信州川中島の村々では、二月の八日がお祭りの日でありますが、この朝は餅を搗いて、これを藁製の馬に負はせ、道祖神の前までひいて行き、その餅を神樣の石像に所嫌はず塗りつけるさうであります。

町の兒童も近い頃まで、「影や道祖神」と唱へて、月の夜などには遊んでゐました。東北の田舍では三十年ぐらゐ前まで、地藏遊びといふ珍しい遊戯もありました。一人の子供に南天の木の枝を持たせ、親指を隱して手を握らせ、その子をとり卷いて他の多くの子供が、かあごめ〳〵のやうにぐる〳〵と廻つて、「お乘りやあれ地藏樣」と、なんべんも唱へてゐると、だん〳〵にその子が地藏樣になります。

物敎へにござつたか地藏さま
遊びにござつたか地藏さま

といつて、皆が面白く歌つたり踊つたりしましたが、もとは紛失物などのある時にも、この子供の地藏のいふことをきかうとしました。またある村では、遊び地藏といつて、いつも地藏さまの臺石ばかりあつて、地藏はどこかへ出かけてゐるといふ村もありました。さういふのは、若い衆が辻の廣場へ持ち

出して、力試しの力石にしてゐるのです。嫁入り聟入り祝言のある時にも、やはり石地藏は若い衆にかつがれて、その家の門口へ遊びに來ました。地藏講の地藏には、廻り地藏といつて、次ぎから次ぎと仲間の家に、一月づつ遊んで行くのもありました。

子供が亡くなると、悲しむ親たちは腹掛や頭巾、胸當などをこしらへて、辻の地藏尊に上げました。それで地藏もよく子供のやうな風をしてゐます。さうして子供たちと遊ぶのが好きで、それを邪魔すると折り〳〵腹を立てました。繩で引つ張つたり、道の上に轉がして馬乘りに乘つてゐたりするのを、そんなもつたいないことをするなと叱つて、きれいに洗つてもとの臺座に戻して置くと、夢にその人のところへ來て、えらく地藏が怒つたなどといふ話もあります。せつかく小さい者と面白く遊んでゐたのに、なんでお前は知りもしないで、引き離して連れてもどつたかと、散々に叱られたので、驚いて

もとの通りに子供と遊ばせて置くといふ地藏もありました。

なるほど親たちは何も知らなかつたのですけれども、子供たちとても、まだやはり知らないのであります。今頃新規にそんなことを始めたら、地藏樣は必ずまた腹を立てるでせうが、いつの世からともなく代々の兒童が、さうして共々に遊んでゐるものには、何かそれだけの理由があつたのであります。遠州國安村の石地藏などは、村の小さな子が小石を持つて來て、叩いて穴を掘りくぼめて遊ぶので、なん度新しく造つても、ちきにこはれてしまひました。それを惜しいと思つて小言をいつたところが、その人は却つて地藏のたたりを受けたといふことです。（横須賀鄉里雜記。靜岡縣小笠郡中濱村國安）

このやうなつまらぬ小さな遊び方でさへも、なほ地藏さまの像よりはずつと前からあつたのであります。昔といふものゝ中には、かぞへ切れないほど多くの不思議がこもつてゐます。それをくはしく知るためには、大きくなつ

て學問をしなければなりませんが、とにかくに大人のもう忘れようとしてゐることを、子供はわけを知らぬために、却つて覺えてゐた場合が多かつたのであります。木曾の須原には、射手の彌陀堂といふのがありました。もとは春の彼岸のお中日に、この宿の男の子が集つて來て、やさいこといつて小弓をもつて、阿彌陀の木像を射て、大笑ひをして歸るのがお祭りであつたさうです。（木曾古道記。長野縣西筑摩郡大桑村須原）

佛様を射るといふことは、大へんなことですが、これにも神様が目をお突きになつたといふ類の、古い傳説があつたのかも知れません。越後の親不知の海岸に近い青木阪の不動様は、越後信州東京の方の人は、不動様といつて拜み、越中から西の人は、乳母様と稱へて信心してゐました。お寺では今から四百年ほど前に、野宮權九郎といふ人が海から拾ひ上げた佛様だといひますが、土地の人は、もとからこの沖の小さな島に、子產み殿といつて祀つて

あつた神様だと思つてゐまして、字を知らぬ人のいつた方がどうも正しいやうであります。といふわけは、このお堂へは、母になつて乳の足りない女の人が、多くお參りをして來たのでありました。さうしてお禮には小さなつぐらといつて、赤ん坊を入れて置く藁製の桶のやうな物を持つて來て、堂の側の青木の枝にぶら下げますがその數はいつも何百とも知れぬほどあるといひます。この神様も地藏と同じやうに、非常に子供がお好きであるといふことで、何かといふ時には、村々から多くの兒童が集つて來たといふことです。あんなこはい顏をした不動様でも、姥神と一しよに住めばつぐらの子の保護者でありました。お盆になると少年が閻魔堂に詣るのも、やはりあの變な婆さんがゐるからでした。（頸城三郡史料。新潟縣西頸城郡名立町）

日本は昔から、兒童が神に愛せられる國でありました。道祖も地藏もこの國に渡つて來てから、おひ〳〵に少年の友となつたのは、まつたくわれ〳〵

の國風にかぶれたのであります。子安姫神の美しく貴いもとのお力がなかつたら、代々の兒童が快活に成長して、集つてこの國を大きくすることも出來なかつた如く、兒童が樂しんで多くの傳說を覺えてゐてくれなかつたら、人と國土との因緣は、今よりも遙かに薄かつたかも知れません。その大きな功勞に比べるときは、私のこの一冊の本はまだあまりに小さい。今に出て來る日本の傳說集はもつと面白く、またいつまでも忘れることの出來ぬやうな、もつと立派な學問の書でなければなりません。

傳說分布表

この本に出てゐる傳說の中で、町村の名の知れてゐる分を、表にしてならべて見ました。この以外の縣郡町村でも、たゞ私が知らなかつたといふだけで、むろん尋ねて見たら幾らでも、同じやうな傳說があることゝ思ひます。下の數字はページ數です。自分の村の話が出てゐましたら、まづそこのところから讀んで御覽なさい。

東京府東京市淺草區淺草公園……箸銀杏……一三九
同　同　下谷區谷中清水町……清水稻荷……七三
同　荏原郡品川町南品川宿（舊）……縛り地藏……二三八
同　豐多摩郡淀橋町柏木（舊）……鎧大明神……二一八
同　同　高井戸村下高井戸（舊）……藥師の魚……七九
同　南葛飾郡龜戸町（舊）……頓宮神……二四〇
同　八王子市子安……齒吹佛……二三八

京都府乙訓郡新神足村友岡……念佛池……三一
同　南桑田郡稗田野村柿花……片目觀音……一二三
大阪府泉北郡八田莊村家原寺……放生池……八三
神奈川縣橘樹郡向丘村上作延……鼻取地藏……二三八
同　足柄上郡南足柄村弘西寺……化粧地藏……二四五
同　足柄下郡大窪村風祭……機織の井……一三四
兵庫縣川邊郡稻野村昆陽……行波明神……八三
同　有馬郡有馬町……うはなり湯……二八
同　加古郡加古川町……上人魚……八四
同　同　野口村阪元……寸倍石……一八四
同　赤穗郡船阪村高山……水掛地藏……二四一
同　多紀郡城北村里岡……時平屋敷……二一三
長崎縣北松浦郡田平村……釜が淵……二四一
新潟縣長岡市神田町……三盃池……八〇
同　北蒲原郡分田村分田……都婆の松……一四六
同　三島郡大津村蓮花寺……姨が井……二五
同　北魚沼郡堀之內村堀之內……古奈和澤池……八〇
同　南魚沼郡中之島村大木六……卷機權現……一一八
同　刈羽郡中通村會地……おまんが井……二六
同　中頸城郡櫛池村青柳……片目の鯉……八八
同　西頸城郡名立町青木阪……乳母神とつぐら……二五三
同　同　根知村……諏訪の薤鏃……一六一
埼玉縣川越市喜多町……しやぶぎ婆石塔……八
同　北足立郡白子町下新倉……子安池……七一
同　同　大砂土村土呂……神明の大杉……一三九
同　入間郡所澤町上新井……三つ井……四九
同　同　小手指村北野……椿峯……一四〇
同　同　山口村御國……椿峯……一四〇
同　比企郡大河村飯田……石船權現……二四二
同　秩父郡小鹿野町……信濃石……一七六
同　同　吾野村大字南……飯森杉……一四〇
同　南埼玉郡萩島村野島……片目地藏……二三六

群馬縣高崎市赤阪町……婆　石……三五
同　北甘樂郡富岡町曾木……片目の鰻……七九
同　利根郡東村老神……神の戒……二一〇
同　同　川場村川場湯原……大師の湯……五三
同　佐波郡殖蓮村上植木……阿滿が池……二六
千葉縣千葉郡二宮村上飯山滿……巾着石……一七〇
同　市原郡平三村平藏……二本杉……一四五
同　印旛郡臼井町臼井……おたつ樣の祠……一〇
同　同　酒々井町……仲の惡い神樣……二一六
同　同　富里村新橋……葦が作……一四四
同　同　根郷村太田……石神樣……一七〇
同　長生郡高根本郷村宮成……新箸節供……一四五
同　山武郡大和村山口……雄蛇の池……一三〇
同　君津郡清川村……疊が池……一四四
同　同　小櫃村俵田字姥神臺……姥神樣……八
同　同　八重原村……念佛池……三三

同　同　闕村大字闕……闕のをば石……一五
同　夷隅郡千町村小高……大根栽ゑず……一〇九
同　同　布施村……二本杉……一四三
同　安房郡西岬村洲崎……一本薄……一四五
同　同　豐房村神餘……大師の鹽井……六一
同　同　白濱村青木……芋井戸……六〇
茨城縣那珂郡柳河村青柳……泉の杜……三五
同　久慈郡阪本村石名阪……雷神石……一八四
同　同　金砂村……横山ぎらひ……二一七
同　鹿島郡巴村大和田……主石大明神……一八二
同　筑波郡筑波町……筑波山の由來……二〇六
栃木縣河內郡上三川町……片目の姫……八四
同　芳賀郡山前村南高岡……片目の皇子……一一四
同　那須郡黑羽町北瀧……綾織池……一三四
同　同　那須村湯本……敎傳地獄……二八
同　安蘇郡犬伏町黑袴……天神の敵……二一三

同　同　旗川村小中……人丸大明神……一一〇
同　足利郡三和村板倉……大師の加持水……七五
奈良縣山邊郡二階堂村……泥掛地藏……二四五
同　高市郡舟倉村丹生谷……雨乞と地藏……二四二
同　吉野郡高見村杉谷……入鹿を祀る山……二二〇
三重縣宇治山田市船江町……白太夫の袂石……一六七
同　飯南郡宮前村……めづらし峠……一五七
同　同　射和村……成長する石……一七四
同　多氣郡佐奈村仁田……二つ井……四六
同　同　丹生村……子安の井……七〇
同　南牟婁郡五郷村大井谷……袂石……一六七
愛知縣丹羽郡池野村……尾張小富士……二〇〇
同　知多郡東浦村生路……弓の清水……五五
同　南設樂郡長篠村横川……氏子片目……一一三
同　八名郡石卷村……山の背くらべ……二〇二
靜岡縣清水市入江町追分……姥甲斐ない……一四

同　賀茂郡下田町……下田富士……二〇七
同　同　岩科村雲見……富士の姉神……二〇七
同　田方郡熱海町……平左衞門湯……三〇
同　同　函南村仁田……手無佛……二三七
同　駿東郡須山村……山の背くらべ……一九〇
同　冨士郡元吉原村……化け地藏……二四五
同　安倍郡長田村宇都ノ谷……鼻取地藏(索麪地藏)……二三九
同　同　賤機村……鯨の池……九〇
同　小笠郡中濱村國安……子供と地藏……二五一
同　周智郡犬居村領家……機織の井……二二五
同　磐田郡見付町……姥と草履……二三
同　同　上阿多古村石神……富士石……一七六
山梨縣東山梨郡松里村小屋鋪組……御箸杉……一四一
同　同　等々力村……親鸞上人の箸……一四二
同　西山梨郡相川村……片目の泥鰌……七九
同　同　國里村國玉……國玉の大橋……一九六

同　東八代郡富士見村河内組……七釜の御手洗……三五
同　中巨摩郡百田村上八田組……しはぶき婆の石……八
滋賀縣蒲生郡櫻川村川合……麻蒔かず……一一〇
同　栗太郡笠縫村川原……麻作らず……一〇九
同　愛知郡東押立村南花澤……花の木……一四八
同　犬上郡脇ケ畑村大字杉……御箸の杉……一四八
同　阪田郡大原村池下……比夜叉の池……一二九
同　東淺井郡竹生村……竹生島の由來……一九二
同　伊香郡伊香具村大音……粉掛地藏……二四五
同　同　片岡村今市……大師水……四五
岐阜縣揖斐郡谷汲村……念佛橋……三一
同　山縣郡上伊自良村……念佛池……三一
同　武儀郡乾村柿野……黃金の鷄……一六二
同　加茂郡太田町……目を突いた神……一〇七
同　益田郡萩原町……蛇と梅の枝……一〇五
同　上原村門和佐……龍宮が淵……一二六

同　中原村瀨戸……ばい岩……一八四
同　朝日村黍生谷……橋場の牛……一六二
長野縣長野市……善光寺と諏訪……二一八
同　北佐久郡三井村……鎌倉石……一七七
同　小縣郡殿城村赤阪……瀧明神の魚……八〇
同　下伊那郡上郷村……恨みの池……八七
同　龍丘村……花の御所……六六
同　龍江村今岡……龍宮巖の活石……一六七
同　智里村小野川……富士石……一六六
同　東筑摩郡島內村……仲の惡い神樣……二一二
同　西筑摩郡日義村宮殿……野婦の池……一二五
同　大桑村須原……矢さいこ行事……二五二
同　南安曇郡安曇村……門松立てず……一〇八
同　北安曇郡中土村……芋作らず……一〇八
同　上水內郡鬼無里村岩下……梭石滝石……一二五
宮城縣玉造郡岩出山町……驚きの清水……三二

同　登米郡賣江村新井田……代振地藏……二三一
同　牡鹿郡鮎川村……金華山の土……二〇三
福島縣福島市腰ノ濱……鼻取庵……二三一
同　信夫郡餘目村南矢野目……片目清水……八三
同　同　土湯村……片目の太子……二一
同　伊達郡飯阪町大清水……小手姫の社……一三三
同　安達郡鹽澤村……機織御前……一三三
同　安積郡多田野村……氏子の片目……一一五
同　南會津郡館岩村森戸……立岩……一八八
同　耶麻郡大鹽村……大師の鹽の井……六〇
同　石城郡草野村絹谷……絹谷富士……一八九
同　同　大浦村大森……すがめ地藏……一一二〇
同　同　大浦村長友……鼻取地藏……二三〇〇
岩手縣岩手郡瀧澤村……送り山……一九三
同　和賀郡小山田村……はたやの神石……一八八
同　同　橫川目村……笠松の由來……一四三

同　下閉伊郡小國村……原臺の淵……一三二
青森縣東津輕郡東嶽村……山の爭ひ……一九四
同　南津輕郡猿賀村……片目の魚……八一
同　下北郡脇野澤村九艘泊……石神岩……一七八
山形縣東村山郡山寺村……景政堂……八六
同　西村山郡川土居村吉川……大師の井戸……五〇
同　北村山郡宮澤村中島……熊野の姥石……一七三
同　飽海郡東平田村北澤……矢流川の魚……八六
同　同　飛島村……鳥海山の首……一九四
同　東田川郡狩川村……毛呂美地藏……二四四
同　西田川郡大泉村下清水……しようづかの姥……三
秋田縣南秋田郡北浦町……片目の神主……一一四
同　同　同　野村……寢地藏……二四三
同　雄勝郡小安……不動瀧の女……一三一
同　北秋田郡阿仁合町湯ノ臺……水底の機……一二六
同　仙北郡金澤町……片目の魚……八六

同　同　荒町……三途河の姥……三
同　同　花館村……雨懸地蔵……二四〇
同　同　大川西根村……おがり石……一八三
福井縣大野郡大野町……山の背くらべ……二〇二
同　三方郡山東村阪尻……機織池……一二九
同　大飯郡青ノ郷村關屋……水無川……四五
石川縣能美郡白峯村……白山と富士……二〇一
同　同　白峯村……二本杉……一四七
同　同　大杉谷村赤瀬……やす女が淵……九二
同　河北郡高松村横山……片目の魚……九九
同　羽咋郡志加浦村上野……大師水……四四
同　鹿島郡能登部村……機織と稗の粥……一三五
同　同　鳥尾村羽阪……水無村の由來……四四
同　珠洲郡上戸村寺社……能登の一本木……一四六
富山縣上新川郡……立山と白山……二〇一
同　同　船崎村舟倉……山のいくさ……二〇八

鳥取縣岩美郡元鹽見村栗谷……布晒岩……一二一
同　同郡……時平公の墓……二一三
同　西伯郡大山村……韓山の背くらべ……一九一
同　日野郡印賀村……竹栽るゞず……一〇九
同　同　霞村……大師講と地蔵……二四七
島根縣飯石郡飯石村……成長する石……一七五
同　鹿足郡朝倉村注連川……牛王石……一七六
同　隱岐周吉郡東郷村……釣上げた石……一七九
岡山縣邑久郡裳掛村福谷……裳掛岩……五九
同　勝田郡吉野村美野……白壁の池……八八
同　久米郡大倭村大字南方中……二つ柳……一五〇
廣島縣豐田郡高阪村中野……出雲石……一七五
同　世羅郡神田村藏宗……魚が池……一〇〇
同　芦品郡宜山村下山守……嚴島の袂石……一六六
同　双三郡作木村岡三淵……布晒岩……二一〇
同　比婆郡小奴可村鹽原……石神社……一八一

同　比和村古頃……赤子石……一八三
同　比和村古頃……疱瘡神社……六九
和歌山縣那賀郡岩出町傳前……杖の藪……四七
同　伊都郡高野村杖ケ藪……雨乞地藏……二四一
同　西牟婁郡中芳養村……蛇の枕……一〇〇
德島縣那賀郡富岡町福村……蛭子神の石……一七九
同　同　伊島……不動の神杉……一五〇
同　海部郡川西村芝……轟きの瀧……一九三
同　同　川上村平井……柳　水……四八
同　名西郡下分上山村……目を突く神……一〇六
同　板野郡北灘村栗田……山の戰……二〇八
同　美馬郡岩倉村岩倉山……粉附地藏……二四五
愛媛縣溫泉郡道後湯之町……杖の淵……四九
同　同　久米村高井……眞名橋杉……一五一
同　新居郡飯岡村……綾を織る姫……一三一
高知縣土佐郡十六村行川……吉田の神石……一七三

同　同　上韮生村柳瀨……山姥の麥作り……一三一
同　高岡郡黑岩村……寶御伊勢神……一七一
同　幡多郡津大村……おんちの袂石……一六八
福岡縣糸島郡深江村……饌　懐　石……一六九
同　三潴郡鳥飼村大石……大石神社……一七一
同　山門郡山川村……七靈社の姫神……二四二
大分縣東國東郡姫島村……拍　子　水……三四
同　速見郡南蹴村天間……由　布　嶽……一九八
同　玖珠郡飯田村田野……念　佛　水……三三
佐賀縣西松浦郡大川村……十三塚の栗林……一五三
熊本縣飽託郡島崎村……石神の石……一七四
同　玉名郡滑石村……滑石の由來……一六九
同　鹿本郡三玉村……山の首引……二三三
同　阿蘇郡白水村……猫　岳……一九一
同　上益城郡飯野村……飯　田　山……二〇〇
宮崎縣西諸縣郡飯野村原田……觀音石の頭……二二一

同　兒湯郡下穗北村妻……都萬の神池……九八
同　同　都農村……山と鹽物……一九九
鹿兒島縣揖宿郡山川村成川……若宮八幡の石……二〇〇
同　同　揖宿村……池田の火山湖……二九七
同　薩摩郡永利村山田……石神氏の神……二八一
同　熊毛郡中種子村油久……熊野石……二七三

檢印

昭和十五年十二月十五日印刷
昭和十五年十二月二十日發行
日本の傳說　定價一圓五十錢

著作者　柳田國男　東京市小石川區指ヶ谷町一一四
發行者　岡本經一　東京市牛込區早稻田鶴巻町一〇七
印刷所　株式會社康文社印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町一一四
發行所　三國書房
東京市芝公園七號地十番
發賣所　大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(43)三九四四番

外738
た

山岡鐵舟・述勝海舟

武士道

日本精神の精髓武士道とは何か。身を以て體驗せる鐵舟翁の熱血漲る大文章に、警拔無比の海舟翁の評。武士道究明の最高峰。

四六判 二三〇頁 定價 一・二〇 送 ・一〇

笹川臨風閲高橋梵仙著

日本年中行事講話

宮中の御儀式を始め、祝祭日、民間信仰、物語行事、特に最近の社會行事及祝祭時の供物等の事物緣起考、其他日本一切の年中行事の謂はれと內容が判る。

四六判 四八〇頁 定價 二・五〇 送 ・一四

倉田百三著

創作親鸞

心ゆくばかり、社會大衆の心の中に信仰を植ゑ付けた親鸞の信仰とその生涯とを小說の形式をかりて描く。宗教文學として稀に見る雄篇。

四六判 二八〇頁 定價 一・五〇 送 ・一四

加藤咄堂著

禪に生きる道

禪を語つて、其の想と筆と、當代第一の著者が廣く大衆の生活、思想、風物、あらゆる所に生動し來る禪の眞面目を語る。心魂に沁み透る解脫の快。

四六判 三三〇頁 定價 一・五〇 送 ・一四

文學博士 鈴木大拙著

禪學入門

非論理、無文字にして兩も東洋思想の根基をなす禪の實體を闡明す。禪學界の巨匠が說く眞髓に徹する此の入門書によつて神祕の扉は開かれた。

四六判 二三〇頁 定價 一・三〇 送 ・一二

東京市芝區七號地 大東出版社 振替東京一四七一 電話芝三九四九

~~911~~ 388.1
~~32~~ Y53
5